

遠藤周作『女の一生 一部・キクの場合』論

——キクの「一生」と「語り手」の視点——

古 浦 修 子

序

『女の一生 一部・キクの場合』は、一九八〇年十一月一日から翌年七月一日にかけて、朝日新聞に連載された。さらにこの作品の終了直後、続けて同作品の『二部・サチ子の場合』が連載されていく。『女の一生』は、二部構成において、それぞれ明治の切支丹迫害事件「浦上四番崩れ」と第二次世界大戦下のキリスト教徒に対する思想統制という日本人の信仰における苦悩の問題を背景とし、日本人におけるキリスト教受容の可能性を問うた作品である。遠藤は、それらの時代を生きる一人の平凡な女性が愛する者のためにひたむきに生きる姿勢を通して、彼女たちの人生の背後に立ち上がってくる聖なるものを描こうとした。

両作品は、武田友寿氏の

ともかく遠藤氏の『女の一生』は、第一部、第二部を併せて要約すれば、「愛」の殉教者たちの生涯を描いた作品である、といえる。(中略) そういうなかで作者の愛する作中人物たちは、それぞれの「愛」——聖書の愛を生きた人びと、しかも命を

捨てて生きた愛を体現しているのだ。(1)

という指摘から始まり、ともに「愛」の主題、とりわけ他者のために自己の命を犠牲にするほどの信仰的性質と強さを備えた「愛」という視点から語られてきた。実際に「人、その友のために死す。これより大いなる愛はなし」という聖書の言葉は、両作品において重要なキーワードとして登場する。『二部』で主人公サチ子の生き方の指針となり繰り返されるこの聖句は、『一部』においては浦上の貧しい切支丹たちの「苦悩と悲しみ」を目の当たりにしたプチジャン神父が想起したものととして、作中に一度しか登場しない。また、キクが愛する男性・清吉のために尽くすのに対し、『二部』のコルベ神父は信仰と人間のために自己犠牲の道を選ぶように、両者の「愛」のあり方や対象は異なる。しかし『一部』の終盤において、聖母マリアが

(あなたは少しもよごれていません。あなたはわたくしの子と同じように愛のためにこの世に生きたのですもの)

と、清吉のために体を汚して死んだキクの生涯を「愛のため」に生きたものとして認め、また、直接彼女の人生に触れた伊藤の

「ゆるしてくれ。おキクさん。ばってん、あんたの一生は見たけん。こげん俺でもウツサン神父さんのよう言われる愛っていうもの何か、わかったとばい」

という告白によって作品が閉じられることから、やはり『一部』においても「人、その友のために死す。これより大いなる愛はなし」という聖句の思想が底流していることが読み取れる。キクは切支丹の教えについて無知であり、清吉への「愛」はあくまでも異性に対する愛を出発点としているが、作品においては、信仰とはまったく無縁なキクがその生涯を通して結果的に「愛」を実践していくさまが描かれている。これはやはり、遠藤が彼女の生き方の中にキリスト教的「愛」が育まれる土壌を見出しているためだと考えられる。切支丹を迫害する役人・伊藤の心を強く動か

したのは、キクの「一生」を通して顕現した神の「愛」とその美しさであった。そして、この「愛」の行為がキクの意図によるものではなく、彼女がいつしかそこへ到達していく、という性質である以上、彼女の「一生」を俯瞰的に眺める視点が必要となる。

先行研究においては、「愛」を通してキクの中に「聖化」が見出されていく点が注目されてきた。三木サニア氏は、遠藤の聖母観⁽²⁾を引き、キクの中にも聖母と共通する「女性の高貴さ―運命を受容するふしぎな力―」を見た上で、キクの死の場面に降る「純白の雪」が「遠藤の好んで用いる浄化の表象」であり、遠藤が「聖母の白い泪やことばによってキクの聖化と救いを明白に示そうとした」⁽³⁾と指摘される。また小野功生氏も、聖母の眼からあふれた「キクと同じように白い泪」に着目し、

ここでは強烈な「泪」の共感を通してイエスの愛とキクの清吉に対する愛の行為が重ね合わされることで、キクの愛に質的転換がもたらされている。下降線が聖化をもたらす上昇のベクトルへと転じている。⁽⁴⁾

と、遠藤が聖母の「泪」によってキクの「聖化」を暗示していることを論じられた。この場面にキクの「聖化」を読み取ることに異論はないが、このことはすでに作中の聖母の

(人間のよこれ、けがれ、苦しみ、罪がすべてその純白の雪の世界のなかにかくれるように、あなたの愛があなたにさわった男のよこれを消した筈です)

という言葉によって保証されている。「雪」や「泪」といったモチーフによって裏づけられるキクの「聖化」は、彼女が命を懸けて貫いた「愛」によって可能となったものである。本論では、「聖化」という先行研究のキーワードから一旦離れ、キクの「愛」の行為と、それに伴う心の動きを追うことで、キクの「一生」が語りかけるものを明らかにすべきであると考ええる。

そのためには、先に述べたように、キクの生き方および彼女に関わった人々の中に刻まれたものとしてのキクの「一生」を、俯瞰的に眺め得る〈語り手〉の存在が重要となってくる。この作品は、

「作者はまず——、この小説に登場する二人の娘を御紹介しておかねばならない」

と始まるように、作者の視点から読み手に語りかけるといふ体裁を取っている。ただし、作中常に作者が顔を出すわけではなく、〈語り手〉作者と断定するには慎重な姿勢を要するが、両者の関係が限りなく近く、キクの「一生」を外側から眺める読み手を強く意識した語りになっていていることは間違いない。このような作品構成であることを考慮すると、〈語り手〉の働きに注目しながら、キクが無自覚に実践していく「愛」の行為の意味を検討することが必要である。

また、キクの「一生」を見るうえで、彼女によって人生に大きな痕跡を残された人物・伊藤の存在を看過することはできない。迫害への「衝動」と「慚愧」の念の間で苦しむ伊藤の内面と、キクの「愛」を併せて考察することにより、人間を清らかな世界へと志向させるものの内実について明らかにしていく。

一、キクの「祈り」と聖母の眼差し

まずは、キクが唯一その心情を吐露する対象である聖母像とのかかわりから、彼女の「愛」のありようを見ていく。

「子供のときから万事、積極的で明快、率直なキク」は、清吉に対して恋心を覚えるとすぐに「うち、清吉さんは好きばい」「うちは清吉さんのお嫁さんになる」と、当時としては考えられない大胆な宣言をする。このように、キクの清吉への思慕は、始まりの時点からその想いの激しさ、そして無意識に対象の本質を見抜く直感的な「愛」の力

の強さを予兆させるものであった。

やがてキクは、清吉が信仰する南蛮寺の聖母像に出会う。彼女は切支丹やその教えになど関心はなく、聖母が何者であるかをまったく知らない。それどころか、彼女は幼い頃から、清吉のいる中野郷は「クロ」であり「悪かことの起こる」場所として教えられてきた。彼女にとって「クロ」すなわち切支丹とは「禁じられたものを信じる無法者」であり「死」を意味したのである。

それにもかかわらず、南蛮寺のこの「ふしぎな女性像」と出会ったとき、キクは「今日までかくも清らかなかくも澄んだ女性の顔を見たことはなかった」と感じ、「しずかな微笑み」さえ見出している。切支丹について何も知らぬうえ、恐れすら抱いていたキクが、初めて見る聖母像に清澄な表情を看取している点は重要である。もちろんキクは、清吉が一度は棄教したとき、聖母像に向かつて、

「あんたはえらか。あんたは恨んですみませんでした。許してくれんね。あんたのおかげで清吉さんは切支丹のごと悪かことから足ばぬきました」

などと言うように、理由はどうあれ清吉が解放され、自分のもとに戻ってくることだけを願っており、聖母の持つ宗教的な意味にはまったく頓着しない。だが、知識も信仰も持たぬキクが、直感的に聖母の清らかさを捉える姿は、その後のキクの「愛」に生きる「一生」を予兆している。そこには遠藤の、キリスト教的「愛」とキクの「愛」に通底するものを暗示しようという意図が含まれていると言えよう。

これらはいくまでキクの自覚の外側に表れるものであり、キクは聖母から看取した清らかさが何を意味するかなど、深く考えることはしない。率直な彼女は、聖母像に対しても自分の感情を真つ直ぐにぶつけ、清吉が入牢したときの不安と辛さを

「うちはもう、あんたば好かんたい。あんたのおかげで清吉さんは牢に入れられたとやけん」

と訴える。このようにキクは、清吉が切支丹であるために折檻や配流という苦難を強いられるたび、

・（あんたも女子やけん。女子やけん、うちのこん胸んうちはわかるやる。うちはあんたに毎日、毎日、祈ったやかね。清吉さんばひどか目に会わせんご）とて……ばつてん……あんたは清吉さんばひどか目に会わせなさつた、あんたも女子なら……うち
のこん悲しか思えば……苦しかとよ……苦しか）

・（みんな、あん女の悪かと。あん女の）

あの女の顔が彼女のまぶたに浮んだ。（中略）あの女がふしぎな力で清吉をつかんで離さない。清吉の心を迷わし、悪い道に連れていってしまった。

と、自分と清吉との間に生まれる障害が聖母像のせいによるものだと考え、怒りや悔しさをあらわにしている。

これらの場面を見ると、作品における〈語り手〉の存在に注目する必要がある。恋人が受ける痛みを自分のことのように捉え、愛するものを奪われた悲しみを吐露するキクの言葉を、〈語り手〉は「怒り、恨み、呪詛という祈り」と意味づける。さらに〈語り手〉は「聖母も愛した者を他人に奪われたこと」「キクと同じようにその時、苦しか、辛かと泣いたこと」を挙げ、聖母とキクの悲しみを重ねている。とは言え、聖母はキクと同列に論じられるべき存在ではない。そこで〈語り手〉が、聖母を愛するものを奪われた女の悲しみを知らぬものとして位置づけることで、キクの悲しみを受容し包み込む聖母像が強調されるのである。

このように、〈語り手〉は意識的に聖母とキクの嘆きの共通性を提示しており、それによってキクの「愛」の本質がより明確に印象づけられるが、津和野に流された清吉を救うため、キクが伊藤に体を与えて以降、彼女の心の動きと聖母への「祈り」も変化を見せる。三木サニア氏⁽⁵⁾、藤田尚子氏⁽⁶⁾は、この出来事のために、キクが「清吉により添い、浦上の蓮華島を歩くあの幸せな夢」を諦めることで、彼女の「愛」が無償のもの、アガペーに昇華したと指摘

される。キクの「愛」の変容については首肯されるものだが、彼女が死の直前に（もうだめんごとある。うちは負けてしまった）と聖母像に語りかけるように、その「愛」は、最後まで清吉を取り戻したいという強い願望によって支えられている。この点に留意すると、彼女の「愛」は自己犠牲を伴うものではあるが、その到達点を無償のものと直線的に結びつけることはできない。しかし、同時に

（もう……うちは清吉さんに近づかれんよ。ばってん、うちはほんとに清吉さんば好いとった）

という想いも噛み締める彼女は、清吉の愛を手に入れることができないことを痛いほど知っている。そう知りながら清吉のためにすべてを投げうってしまったキクの、変容の内実を考察するうえで注目すべき点は、キクが伊藤に身体を奪われたことで自分の無力と汚れを強く自覚していくという心の揺れの過程である。作品を俯瞰したとき、キクのこの行為は死に際しての「あなたは少しもよごれていません」という聖母の言葉によって浄化されていくのだが、キクの認識のレベルでは、清吉のためとはいえ自身を汚さねばならなかったことを深い悲しみとともに受け止めている。彼女は、

伊藤に抱かれるたび、一段ずつ落ちていく。清吉のいる世界にはもう這いあがれぬほど地の底に落ちていく。キクはそれが何よりも辛かった。

と、拷問にも屈せず信仰を守る清吉を清らかな存在として捉え、体を汚した自分は今もう清吉に近づけぬ者であると考ええる。この汚れの自覚は、キクの中で掘り下げられることはない。しかし、落ちた自分の汚れに苦しむキクのありようが「語り手」によって述べられるとき、そこに対置する聖なるものの存在が浮き彫りとなるのである。汚れの自覚から生ずる心の痛みに耐えながら、キクは「行くあてもなく清吉の通った大浦の教会へと向かい、聖母像に語りかける。「堕ちていく」悲しみの中で教会を訪れ「うちも何もしてやれんと。哀しか、哀しかよ、何もしてやれんもん

……」と聖母像に語りかけるキクは、汚れた自分と対極にある聖なるものを無意識に求めていると言える。また、再び伊藤に金を要求されたキクは、聖母像を想起し

この世には自分の体をけがさねば愛をつらぬけぬ女がいるのだ。そのような女の悲しみをあんたはわかるまい。生涯生娘だったとかいふあんたは、嫌な男に一度も抱かれたことがないのだから。

と心の中で叫ぶ。聖母の処女懐胎の話を「阿呆アボムごたる」と言い、清吉と口論になったキクであったが、自分が汚れた今、聖母の清らかさを意識せずにはいられない。キクは信仰のために聖母に語りかけるわけではないが、「愛」によって汚れ傷ついたキクが、唯一自分の思いを語る相手として聖母を選んだ心理の裏側には、彼女が聖母を、自分の痛みを受け止め、「愛」へと誘う存在であると直感的に看取したことが働いている。

切支丹の教えに関心を持たない彼女は、当然これらの意識の流れを把握することはない。しかし、それをへ語り手へが言葉にすることによって、信仰的な世界を知らぬはずのキクの中にも「愛のために自分の体をいけにえにする」行為へと促すものが底流していることが浮かび上がる。己の無力と汚れを痛感してもなお、もう近づけぬとわかつている清吉への「愛」を貫こうとするキクのありようは、現実的な価値観を超えた絶対的な存在を魂のレベルで渴望する人間の心理と、根底の部分で繋がっているのである。

二、人間らしさの表出

切支丹に拷問を加える下級役人・伊藤は、他者を責め苛むという「愛」とは正反対の行為の行い手であるが、彼もまた、

「俺あこげん汚か人間ばってん、聖女ていうものこん世におつことばあん女ば通して知ったとばい」

と、自分の醜さを自覚することによって聖なるものの存在を認識し、そこに触れていく人物であると言える。伊藤はキクを抱くたびに（俺あ……まこと悪か男ばい。まこと悪か男たい）とひとりごちる。さらに、キクが体を売って作った金で酒を飲みながら

・「俺どんはあ……そげん心のよこれきった者たちばい。女の心ばふみにじつてそいで酒ば飲む人間たい」

・「放つとけ。俺はな、そげん俺がイヤでたまらんたい。ばつてん今更変わるわけにはいかん。こいつは生まれついた性格やろ。性格は変ゆつことはできんけん……」

と、清吉のために己の身を犠牲にしてまで尽くすキクの生き方と対比する形で、自分の醜さを「心の痛み」とともに十分に自覚している。しかし、伊藤は自身の醜さと向き合いながらも、それを凝視するまでの勇氣を持ってぬ弱い人間である。へ語り手へは伊藤の行為と内面を、

だが伊藤という男のふしぎさは、前夜それほどやましさを心の痛みを感じたのに、その痛みのぶんだけ、翌日囚人たちを苛める点だった。

と分析する。伊藤は酒を飲んで酔いつぶれることによって「心の痛み」を誤魔化すが、そうして無理に振り切らねばならぬほど、彼の「心の痛み」は根深いところから生じている。

伊藤はしばしば矛盾する心理や行動をあらわす人物である。囚人たちに責苦を与えるとき、彼の中には「言いようのない憐れみと言いやうのない残忍の衝動が同時に起こる。また、

キクは死ぬだろう。伊藤はキクが好きだった。好いてもキクが自分のような醜い男に惚れてくれぬことを承知でやはり好きだった。好きだから苛めた。苛めたがキクの清吉を思う宝石のような心を彼は誰よりも知っていた。

と、伊藤はキクの美しい心を愛しながら、それには手の届かぬ醜い自分を嫌悪し、その反動によって彼女を「苛め」

てしまう。このように、伊藤は己の卑怯さ、醜さを知るがゆえに心の深部にある良心や美しいものへの憧れとの矛盾に絶えず苦しめられている。伊藤は自身の内面を凝視することはなく、ただ己の醜さを嫌悪するが、その複雑な心理は、彼の表出する感情の多様性とそれらの起伏の大きさにも表れていると言える。

藤田尚子氏は、伊藤の内面について

切支丹に責苦を与えるたびに味わっていた「自分でも抑えることのできぬ快感と衝動」とは、この空虚感によるものである。だがこの空虚感、伊藤の魂が伊藤に真の生に目覚めるよう促していたということの意味するものであったといえる。⁽⁷⁾

とし、その気づきの契機となったのがキクの存在であったと考察される。この指摘をより具体的に換言すると、伊藤が他者を苛む行為の裏には、何か満たされぬものを埋めようとする心理、弱い自分の拠り所となり癒してくれる存在を渴望する人間の本能的な願望が隠されていると考えられる。このように、伊藤の内面凝視の直接的な契機はキクの存在であったが、ここで重要となるのは、伊藤の性質そのものが変容したのではなく、彼がキクのひたむきな「愛」に触れることによって己の魂に目を向けることとなったという点であり、その内面の揺れを考察する必要がある。

このことは、伊藤が苛む者たち——切支丹やキクのうちに「強さ」を見出している点からも窺える。伊藤は、責め苦に耐えて信仰を守る切支丹たちを見るにつれて

「ばってん、あいつらの強さばみたら、あいつらの信心しとるもんが何かで考えるばい。あいは女が一人の男に惚れぬいた時の強さによく似とる。女が一人の男に惚れた時は、何もかも捨てて一途になるじゃろが」

と、彼らの「強さ」と、人間が生命を賭けてまで守ろうとする信仰や「愛」の存在について考えを及ぼせるようになっていく。「そねえな女子がおるかねえ？」という「馬鹿にしたような」問いに、伊藤は、

「おる。そげん女のおるたい。惚れた男のために、おのれば捨て、おのればよこしても尽そうてる女のおる」

と「キツとして」反駁し、「それから眼をつぶって」「何かをしばらく考えこむ」。伊藤が何を考えているのかは明らかにされないが、「おのればよごしても尽そうてする」キクという女が実在することをむきになって訴える伊藤のうちには、彼女の存在が確かに息づいている。このとき伊藤は、キクの「愛」の本質を理解しており、己の醜さだけでなく、人生における尊いもの、美しいものの意味を眼差していると見えよう。自身の罪深さを自覚したうえで苦しみ、それを癒してくれる何物かを求める伊藤は、「信心」や「一途」さにその手がかりを見つけるが、自分が希求しているものの正体を掴むことができず、他者を苛むという同じ過ちを繰り返してしまふ。だが、同じ過ちを繰り返すということは、伊藤がそれほどこの問題に固執しているということでもある。やり場のない苦しみから生まれる負の「衝動」を、他者を苛む行為に転換することで、堂々巡りしながく伊藤に、プチジャンの次の言葉は「重みをもつて心のなかで反響」する。

・だが神さまはそげん本藤さまよりもあなたさまのそのひがんだ心、傷ついた心に入りこもうとされます。神さまは今のような出世欲に燃えた本藤さまには興味は持たれんとです。ばってん伊藤さまのその心のほうにひかれとられる」

・「苦しみはあの者たちの間に愛は生み出しますけん。苦しみのなければ……伊藤さま、愛も生れんですたい」

伊藤は、この言葉によって、

彼は思った。自分のような卑劣、卑怯、狭く利己主義、欲望を抑えることのできぬ人間は虫けらと同じだと。その虫けらら神の眼には本藤舜太郎よりはるかに価値があるというプチジャンの奇怪な言葉は一体、何だろうと……。

と、己の弱さを初めて客観的に見つめることとなる。伊藤はこのプチジャンとの会話の意味を容易に理解したわけではない。しかし、この言葉は彼のうちに留まり、「虫けら」のように無価値な自己を見捨てず愛するという神の存在を意識させ、やがては信仰へと導いていくのである。

伊藤という人間の弱さ自体が変容することはない。彼はその後、死んだキクに対し「俺のことば、許してくれんね」と詫びるが、「そのくせ彼は自分の弱さが明日にも、今までと同じような行為に走らせることもよく知っていた」。また、数十年ぶりに清吉と再会し、許しを乞うときにも「酒の力を借りねばならぬ（中略）勇気のなさ」を見せる。しかし、このとき「語り手」は伊藤が自分の弱さを告白する姿を「それは教会の告解室で信者が自分の長年、秘密にしていた罪を神父にうちあける時のためらいの表情とそっくりだった」と表現している。そのような様子で、伊藤は

「俺あ、おキクさんば欲しかったとばい。心の底から欲しかったと」

と、彼の行為のうちに潜んでいた思いを吐露する。これは、伊藤がこれまで無意識的に押さえつけてきた人間らしさの表出だと言えよう。彼の変容は、「自分の弱さ」を無条件に受容してくれる存在を知ったことを意味している。そして、伊藤が清吉にすべてを打ち明けるさまを、「語り手」が「告解」と同質のものとして語ることにより、彼にも神の眼差しが注がれていることが暗示されているのである。

伊藤をその地点へと導いたのは、キク存在であった。伊藤は、清吉への「愛」を懸命に貫くキクの「一生」に触れ、その「一途」さに、本当に人間らしい生き方、換言すれば魂のレベルで他者を求める生き方の尊さを実感したのである。

三、キクの「一生」が語りかけるもの

キクは、罪人として囚われ「だからから見捨てられた」清吉を信じ愛し続けることで、迫害の苦しみを癒す「慰めの歌」「憩いの泉」となった。そして、その「一生」を目撃した伊藤に「愛」とは何であるかを知らしめ、キクに触

れることを契機に彼の心は解きほぐされていった。だが、そのキクもまた自身の無力や汚れに傷つき苦しむという過程を経ながら「愛」を貰ったことよって、聖母と同じ「純白の世界」へ促されていくのである。プチジャンが伊藤に語る「苦しみのなければ……伊藤さま、愛も生まれんですたい」という言葉は、「人、その友のために死す。これより大いなる愛はなし」の聖句とともに、作品の主題を表している。『一部』を底流し、『二部』へと繋がっていく「愛」は、「苦しみ」という人間の暗部のうえに成り立つものなのである。

また、すでに述べたように、キクの苦しみの中の「愛」の行為の実践は、あくまで彼女の「一生」を俯瞰したとくに真に理解されるものである。ここで再び「語り手」の役割に目を向け、キクの「一生」が語りかけるものを明らかにしていく。

『沈黙』など過去の作品において、遠藤は迫害に苦しむ切支丹ら弱者に光を当て、彼らの救済の可能性を追究してきた。『女の一生』においても、ペーロン競漕に大騒ぎし「祭りに酔いしれ」る長崎の街の人々と、切支丹たちの暮らしは対照的に描かれている。

だがここは祭りではなく人間の苦悩と悲しみが充ちていた。「人、その友のために死す。これより大いなる愛はなし」プチジャンはあの聖書の言葉を思い出した。

幸いなるかな 泣く人

彼等は慰められるべければなり

彼は片手をあげて苦しみや悲しみに曝されたそれら人間の顔を祝福した。

プチジャンは、これら貧しく惨めな切支丹たちの姿に、聖書の言葉を想起する。プチジャンが想起した聖句が「語り手」よって提示され、切支丹たちの「苦悩と悲しみ」とに充ちた姿と重ねられることで、彼ら弱者に注がれる神の

眼差しとその「愛」が暗示される。藤田尚子氏は、この場面について

ここに、賑やかな陽気さではなく人間の苦悩と悲しみにこそ「人、その友のために死す。これより大いなる愛はなし」、「幸いなるかな泣く人 彼等は慰められるべければなり」という福音書の言葉に繋がる、信仰上の価値を置く『女の一生』のテーマが明確に込められていると考えられる。⁽⁸⁾

と指摘される。弱者への共感の眼差しは、遠藤文芸に一貫して見られる特徴の一つであり、『女の一生』においても、その弱者観はブチジャンの言葉を通して示されている。それに加え、この作品では、弱者である作中人物らが苦しみの中で結びつくことによって、「愛」を求め、生み出していくさまが描かれ、その究極の形としてのキクの「一生」が作品を貫いているのである。

さらに作品全体を包括するものとして、キクを包み込み、浄化する聖母の存在がある。しかし、ここで聖母が

(人間のよこれ、けがれ、苦しみ、罪がすべてその純白の雪の世界のなかにかくれるように、あなたの愛があなたにさわった男のよこれを消した筈です)

と語りかけるとき、すでにキクは力尽きており、彼女自身がこの言葉を耳にすることはできない。そのため、聖母の言葉によって閉じられるキクの「一生」を考えるには、やはり彼女の生涯の外側からすべてを物語る〈語り手〉の視点が必要となる。自身の心の揺れに対して自覚的ではないキクが次第に「愛」を実践していくさまを、〈語り手〉が客観的・俯瞰的な視点から語るといふ作品構造において、聖母の言葉を残響的に配置するということは、作者がキクの〈聖化〉を断定的に描くことを避け、〈語り手〉がキクと聖母を重ねて語ることで、〈聖化〉されたキクのイメージを浮かび上がらせようとしたのだと考えられる。キクの自己犠牲の「愛」は、決して彼女が意図的に成し遂げたものではない。一人の男性を懸命に愛し、苦しみながらも真っ直ぐにその想いを貫いたキクの生き方が、結果的に崇高な

「愛」の形を實現したのであり、この事實は（語り手）の視点によって初めて鮮明になる。キクの「愛」と、彼女に触れた伊藤の人間らしさの表出を見たとき、（聖化）とはそこに至る者だけの問題ではなく、人間が他者の人生に残す消しごたい痕跡と、そこに顕現する神の働きとの関係の上に成り立つものであると言えよう。そして、不可視である神の「愛」を（語り手）が聖母の言葉として語ることにより、（聖化）の内実が明らかとなるのである。

人間たちの苦しみが「愛」を作り出し、そこには聖なるものへの志向性が暗示されるという発想は、『女の一生』を特徴づける人間肯定の視点から生まれている。遠藤は、人間の「愛」と神の「愛」との関係について

如何なる愛慾のなかにも愛するもののため己れを空しくする犠牲の欲望が人間の本能にあることを知った。そして亦、愛慾の別の力、いかなる劣次元の肉慾にさへも、他者の人生に消えがたい痕跡、方向、可能性を残していくふしぎな力を悟った。愛するとは所有しようとする意志であった。そして神を所有しようとする欲望と恋人たちの愛慾との間に、次元の差こそあれ、愛さずにはいられない意志、自己犠牲の欲望、結合に対する本能……ふしぎな類似点を見出したのであった。⁽⁹⁾

と、両者をまったく別次元のものとして捉えるのではなく、そこに信仰との類似点を指摘している。遠藤は、人間が地上においてかけがえない他者との「愛」を求める心理には、神の「愛」に顕れるような絶対性・普遍性への無意識の希求が隠されていると考へる。だからこそ、キクは最期を迎える場所として、南蛮寺を選ぶのである。彼女自身は、それは「清吉の姿を偲ぶことができる」場所だからだと考へるが、清吉にとつて「大事な所」である南蛮寺の「崇めていた」聖母像のもとへ向かうキクは、清吉の面影の彼方に、自分を受け入れ、包み込んでくれる存在を欲しているのである。

平凡な一女性・キクの「一生」の中に、伊藤が「あん女は……聖女やつたたい」と言うほどに尊いものを見出したのは、愚直なまでに一人の男性への「愛」に生きる彼女から滲み出る、人間としてのリアリティーの力によるもので

あつた。キクを眼差し包み込むものとしての聖母もまた、彼女の

(もう……うちは清吉さんには近づかれんよ。ばってん、うちはほんとに清吉さんば好いとつた)

(中略)

(うちは……ほんとに清吉さんば好いとつた)

という叫びのような祈りを聞き、「キクと同じよう」な「白い泪」を流す。愛するという感情や行為そのものはない。キクは、自ら「愛」の内実について語るといふことはしない。しかし、彼女の「愛」によって貫かれた「一生」、他者への「一途」な想いによって衝き動かされる生き方が、言葉以上に伊藤の心を動かし、彼の聖なるものを希求する心を呼び覚ましたのである。

信仰の有無に関わらず、人間はその生に伴う「苦悩と悲しみ」と無縁ではありえない。作中人物らが自覚的に、あるいは無自覚的に抱える苦しみは、キクの「愛」を昇華させ清らかな世界へと導き、彼女に触れた伊藤や清吉の魂を浄化した。そして、ひたむきな「一生」の結果として「人、その友のために死す。これより大いなる愛はなし」という聖句の精神を体現したキクの魂は、『二部』においてミツの孫・サチ子へと受け継がれ、第二次世界大戦期という複雑な時代を生きる人びとを抱える悲惨や孤独を支え、その中にあってこそ真に顕現する「愛」の問題を投げかけていくのである。

注

- (1) 武田友寿『沈黙』以後―遠藤周作の世界』女子パウロ会 一九八五年六月 三九〇頁
- (2) 遠藤周作『遠藤周作『聖書の中の女性たち』(講談社文庫 一九七二年十一月 九六頁)

- (3) 三木サニア『女の一生 一部・キクの場合』試論——愛と聖化をめぐる——〔遠藤・辻の作品世界——美と信と愛のドラマ——〕双文社出版 一九九三年十一月 一二八頁
- (4) 小野功生『女の一生』——そのテーマ構造——〔遠藤周作——その文学世界——〕国研出版 一九九七年十二月 二二二頁
- (5) 三木サニア 前掲論文（二二二頁）
- (6) 藤田尚子「遠藤周作『女の一生』論——愛と自己犠牲の変容——」〔光華日本文学〕第八号 二〇〇〇年八月 八四頁
- (7) 藤田尚子 前掲論文（八八頁）
- (8) 藤田尚子「遠藤周作『女の一生 一部・キクの場合』論——執筆背景と長崎風物の一典拠——」〔遠藤周作研究』創刊号 二〇〇八年九月 八二頁）
- (9) 遠藤周作「フランソワ・モーリヤック」〔異邦人の立場から』講談社文芸文庫 一九九〇年七月 九四頁／初出「近代文学」一九五〇年一月号 九四頁）

*本文引用については、『女の一生 一部・キクの場合』（新潮文庫 一九八二年一月）を使用した。

（こころ） しゅうこ・関西学院大学大学院博士課程後期課程